

祖子分長池古墳

昭和63年12月

島根県教育委員会

例　　言

1. この報告書は、昭和62年度、島根県教育委員会が県土木部の委託を受けて実施した国道431号バイパス建設予定地内の発掘調査の概要である。

2. 調査組織（昭和62年度）

調査主体 島根県教育委員会教育長 松井邦友

事務局 文化課長 熊谷正弘、同課長補佐 勝部 昭

調査員 埋蔵文化財第2係長 川原和人、同主事 内田律雄

調査補助員 島根県教育文化財団嘱託 片岡詩子

3. 調査協力（順不同、敬称略）

山本 清、渡邊正巳、江川幸子、岡本登見雄、長羅 忠、竹内信枝、
佐藤順子、林 健亮、金津まり子、野津英治、川本桂子、岩成千里、
小塙雪江、小塙静子、田辺静江、片寄千栄子、横井生子、山本京子、
小塙都子、小塙貞子、小塙テル子、奥村カツ子、木村八重子、小塙頼彦、
曳野律夫、吉岡玄一、平尾博子、吉田栄三郎、安達真一、江角日出郎、
安達幸子、安達文子、山根艶子、井上節夫、高橋良明、影山 筆、
片寄文夫、松江土木事務所、松江市教育委員会

4. 第13図1と2は、山本清先生の原図より作成し、掲載した。

5. 本書は、江川幸子と内田律雄が執筆し、編集は内田が行った。

目　　次

I 調査に至るいきさつ	1
II 位置と環境	1
III 祖子分長池古墳	5
IV 祖子分胡麻畑遺跡	9
V 小結	10
写真図版	20



祖子分長池古墳（主体部検出時東より）



祖子分長池古墳遠影（北側より）

I 調査に至るいきさつ

昭和48年2月、松江土木事務所長から、主要地方道松江一境線バイパス（現国道431号線バイパス）建設予定地内の松江一本庄区間の遺跡分布調査の依頼が県教育委員会文化課にあった。これを受けた県教育委員会文化課では同年2月に分布調査を行い、バイパス建設予定地内に26か所の遺跡を確認した。

その後、島根県土木部道路課、松江土木事務所、県文化課の三者による協議をくりかえし、これらの遺跡をできるだけ保存するようなかたちで道路建設予定ルートを決定し、一部の遺跡については発掘調査を実施してきた。^{註1,2}

昭和62年7月、バイパス建設予定地内の松江市下東川津町祖子分において、一学生によって分布調査では確認することができなかった古墳と須恵器数片が発見された。既に工事は古墳の存在する丘陵麓にまで迫っており、県土木部から委託を受けた県教育委員会では、文化課職員によってこれを急遽発掘調査した。

発掘調査は、昭和62年9月1日から約1か月をかけて実施した。発掘調査を行った遺跡は小字名をとって、古墳は「祖子分長池古墳」、須恵器片散布地は「祖子分胡麻畑遺跡」と命名することにした。

II 位 置 と 環 境

祖子分長池古墳及び胡麻畑遺跡は、島根県松江市下東川津町祖子分に所在する。この祖子分は和久羅山（261.7 M）から北西に向かい派生する八つ手葉状の細長い低丘陵に狭まれた幅約100m、長さ約1.5kmの狭長な冲積平野と、そこに2軒～5軒を一つの単位とした家がいくつか集まってできた小集落の字名の一つである。現在、可耕地は10町ほどあり、それを潤す新川は、この小平野を貫き朝酌川と合流する。そして、朝酌川は、祖子分のような相似かよった小平野から流れる小河川をいくつも集め、朝酌川流域平野の大動脈ともなり美しい穴道湖に注いでいる。

朝酌川流域の原始・古代遺跡については、「川津郷上誌」や「朝酌川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ」等に詳述されているので、ここではその主要な遺跡についてのみ概要を述べておくことにする。^{註3,4}

朝酌川流域において、縄文時代以前の確実な遺跡は発見されてはいないが、縄文時代早

期末～前期になると、西川津町海崎の丘陵麓に一つの「ムラ」が作られるようになる。その墳穴道湖はまだ現在のような汽水湖ではなかったようで、西川津遺跡海崎地区ではヤマトシジミはほとんどみられず、シカ、イノシシを中心とする獸骨、チヌやフグといった魚骨が縄文土器や石器とともに出土している。^{註5}

縄文時代中期の様相ははっきりしないが、後・晩期になると、西川津海崎地区の他、タテショウ遺跡、金崎遺跡、朝酌川上流部の芝原遺跡などで土器や石器が発見されている。

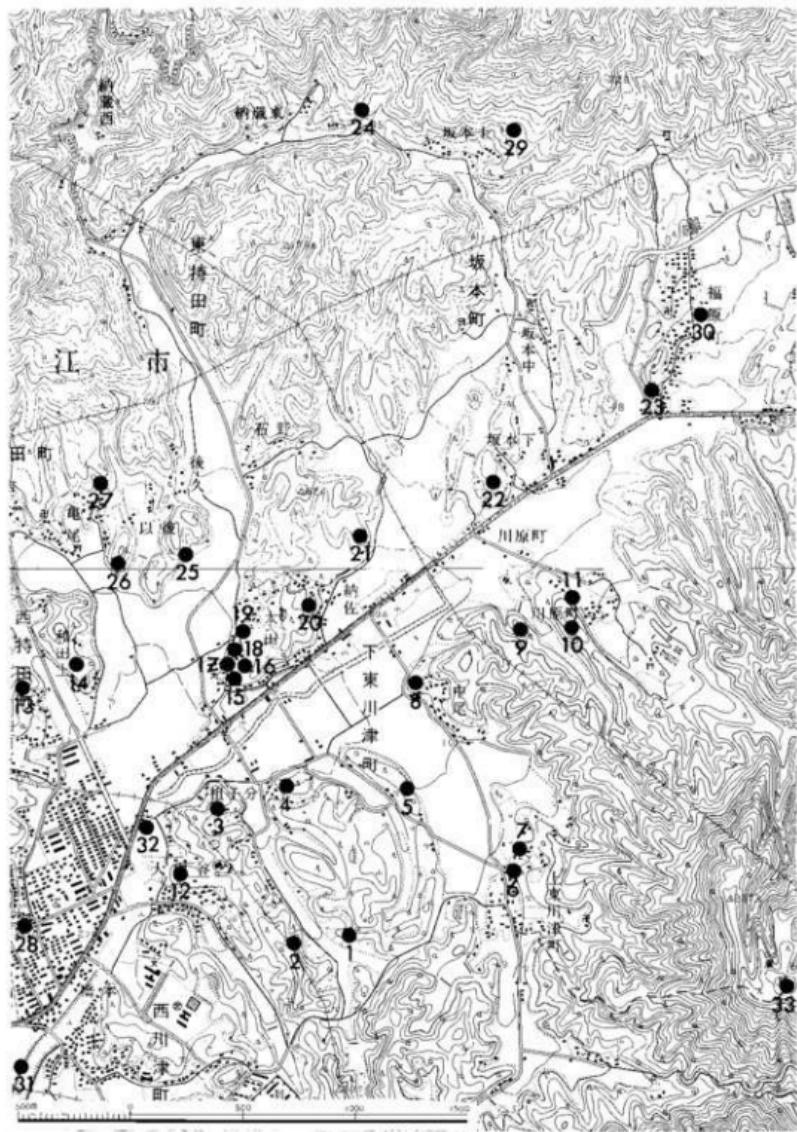
弥生時代になると、西川津遺跡海崎地区では、縄文時代と比較するとかなり大規模な「ムラ」が成立したらしく、多量の木製農耕具、獸骨製漁労具、炭化米等の他に、木製農耕具の木製品を貯蔵したと考えられるウッドサークルや、2×3間の掘立柱建物跡、ヒヨウタソの貯蔵穴が検出されている。特に貝塚はヤマトシジミでそのほとんどが占められており、フナやコイ、カワニシ等、汽水～淡水産の魚介類も目立って多い。このことは、弥生時代には穴道湖が現在の自然環境に近いものであったことを示唆しており興味深い。

古墳時代前期になると、朝酌川流域の丘陵上のあちこちに小規模な方墳や小集落が少しずつつくられるようになる。中期には西川津町薬師山古墳、金崎1号墳のような前方後方墳、西持田町大源1号墳、宮垣2号墳といった全長50m内外の大形円墳があらわれるとともに、ほとんどの丘陵上には一辺10m内外の小規模な方墳がみられるようになる。本書で報告する祖子分長池古墳もそのような方墳の一つであると考えられる。また、西川津町堤廻遺跡ではこの頃の集落跡も発見されている。後期には、坂本町に横穴式石室2基を有する全長50mの前方後方墳である薄井原古墳が唯一の大形古墳として築かれ、下東川津町にある長さ18mの小規模な前方後円墳の小松谷古墳や、切石を使用した小規模な石棺式石室、そして横穴墓が多くみられるようになる。

歴史時代の集落もほぼ古墳時代のそれと同じ場所か、その付近にあったと考えられる。奈良時代に編纂された『出雲國風土記』によると、朝酌川流域はほぼ島根郡山口郷にあたり、3つの里に行政区画され、島根郡家も置かれていたことが知られる。島根郡家は近年の松江市教育委員会の調査により、福原町芝原遺跡がその有力な候補として浮上してきた。寺院、官衙に關係するものでは嵩山(330M)に烽が設置され、朝酌川河口付近のタテショウ遺跡では何らかの公的な施設が存在したことが推定されている。奈良時代の寺院跡は現在のところ知られてはいないが、平安時代になると、坂本町別所の山中に一つの寺院が建立された。寺域内からは延喜通宝の入った須恵器壺の藏骨器や、八葉単弁の瓦当文様をもつ一本作りの軒丸瓦やや退化した均整唐草文軒平瓦が発見され、坊床庵寺とよばれている。奈良時代に島根郡の大領であった社辺氏の建立と考えられる。^{註10}

祖子分長池古墳と周辺の主要遺跡（第1図に対応）

番号	遺跡名	所 在	時 代 等	遺 物 ・ 文 紙 等	島根県遺跡地図番号
1	祖子分長池古墳	下東川津町	古墳時代前～中期	土師器、方墳	
2	一の谷古墳	"	古墳時代中期	円墳	
3	貝崎古墳群	"	"	方墳14基、須恵器、円筒埴輪	D-130
4	前田古墳	"	古墳時代後期	方墳、須恵器、円筒埴輪	
5	八色谷古墳群	上東川津町曾出	古墳時代	須恵器、方墳10基	D-129
6	西宗寺古墳	"	古墳時代後期	横穴式石室、須恵器	D-123
7	葉佐馬古墳	"	"	"	D-122
8	中尾古墳群	下東川津町	古墳時代前～中期	箱式石棺、土築器	D-341
9	小松谷古墳	"	古墳時代後期	横穴式石室、前方後円墳	
10	後谷古墳群	川原町	古墳時代	方墳	
11	荒神古墳	"	古墳時代後期	横穴式石室	D-89
12	住吉神社裏古墳	西川津町	古墳時代中期	方墳、須恵器、円筒埴輪	D-78
13	宮垣古墳群	西持田町	"	円墳、径30m	D-109
14	大源古墳群	"	"	円墳、円筒埴輪、径35m	D-101
15	加佐奈子古墳	東持田町	古墳時代後期	横穴式石室	D-93
16	野津真宅前古墳	"	"	"	"
17	加美古墳	"	"	"	"
18	佐々木浅市老古墳	"	"	"	"
19	佐々木亮畠古墳	"	"	"	"
20	道仙古墳群	"	古墳時代前期	方墳、土師器	D-292
21	原ノ空古墳	"	古墳時代中期	円墳、径25m	
22	薄井原古墳	坂本町	古墳時代後期	前方後方墳、須恵器、馬具、50m	D-85
23	山根古墳	福原町	"	円墳？、土師器	D-83
24	古妙見古墳	坂本町別所	"	横穴式石室	D-88
25	城の越横穴群	東持田町	"	須恵器	D-98
26	小丸山古墳群	"	古墳時代前期	方墳	D-107
27	穴の口横穴群	"	古墳時代後期	横穴	D-106
28	金崎古墳群	西川津町	古墳時代中期	方墳、須恵器、堅穴式石室等	D-131
29	坊床廻寺	坂本町別所	平安時代	寺院跡、古瓦、須恵器等	D-235
30	芝原遺跡	福原遺跡	奈良時代	島根郡家推定地	D-461
31	タテチヨウ遺跡	西川津町	绳文～中世	绳文土器、石器他	D-6
32	西川津遺跡	"	绳文～中世	弥生土器、石器、貝塚他	D-5
33	布自枳美烽	上東川津町	奈良時代	烽跡、須恵器、土師器	D-301



第1図 祖子分長池古墳と周辺の主要遺跡 (1/25000)

III 祖子分長池古墳

発掘調査前の祖子分長池古墳は、東高西低の馬背状の低丘陵に築かれた一辺約7.0mの方台状を呈していた(第2図)。丘陵の高い方に幅0.8mの切削溝と丘陵のカット面が認められた。墳頂部の高さは標高約25.0m。切削溝からの墳頂部までの高さは0.4mである。墳裾は後世の開墾のためか明確ではなかった。また、同一丘陵上には表面的な観察では付近に他の古墳はみられない。

墳丘の発掘は、ほぼ東西南北に上層観察用のセクションベルトを残して表土を除去し、主体部と墳裾の検出を行った(第3図)。その結果、墳丘のほとんどは表土下はすぐに地山となり、墳頂部も盛土は流出していた。墳裾は、ほぼ東西南北に直線的になり、東西6.5m、南北約6.0mのやや歪んだ方墳であることが判明したが、これは地山切削時の裾であり、元来、古墳の規模はもう一まわり大きく整ったものであったろう。

墳丘東側で丘陵の高い方は比較的の残存状態が良好であった。切削溝は南北方向(丘陵に直交する方向)に設けられ、下幅で0.85mを測る。丘陵の加工は半月状に27.0mセンターあたりからはじまっており、発掘前のみかけのそれと約0.3mの差が生じた。

墳頂部には、東西4.0m、南北2.9mの平坦面と主体部の痕跡を表土下に検出した。盛土は皆無に近く、第3図の主体部検出時の状況は、墳丘を築く際の地山加工段階を示しているものと考えられる。発掘終了時の切削溝からの墳頂部までの高さは1.0mあり、墳丘築成当初はその上に少なくともさらに1.0mは盛土がなされていたものと推定される。

主体部は、その痕跡をわずかに認められた。磁北との関係はN-13°-Eで、頭部を欠くが、ほぼ北向きに置かれた木棺直葬であったと考えられる(第5図)。長さ2.1m、最大幅0.52m、深さは最も深いところで0.05mであった。復元すれば長さは2.25mほどになると思われる。第3図が示すように墳形と主体部の方向との関係は一致していないが、あるいは方墳の対角線上に設置しようとしたのかもしれない。

遺物は主体部の直上の表土中に28片の上師器片がまとめて出土した(第3図、図版2)。細片であるために不明な点が多いが、内面にヘラ削りの痕跡が認められる。壺、もしくは甕の底部に近い部分であろう。主体部の中に副葬されていたか、主体部の上に置かれていたと思われ、本古墳に関係するものと考えられる。

また、本古墳の南西部約2.0m、標高24.0mセンターあたりに3.6×2.9mの長方形プランの平坦地が認められた(第3図)。遺物は検出できなかった。古墳との関係は不明で

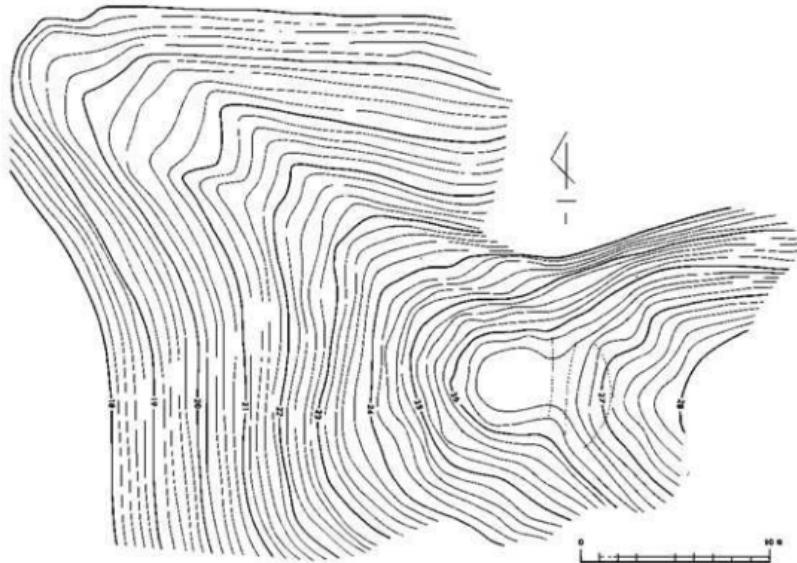
あるが一応報告しておくことにしたい。

一方、後述する祖子分胡麻畑遺跡からは円筒埴輪の小片が一片採集されている。祖子分胡麻畑遺跡は本古墳の存在する丘陵の南側麓にあたり、他に古墳はみられないことから、盛上流出以前は幾許かの円筒埴輪を有していた可能性がある。

以上のような祖子分長池古墳の特徴をまとめると次のようである。

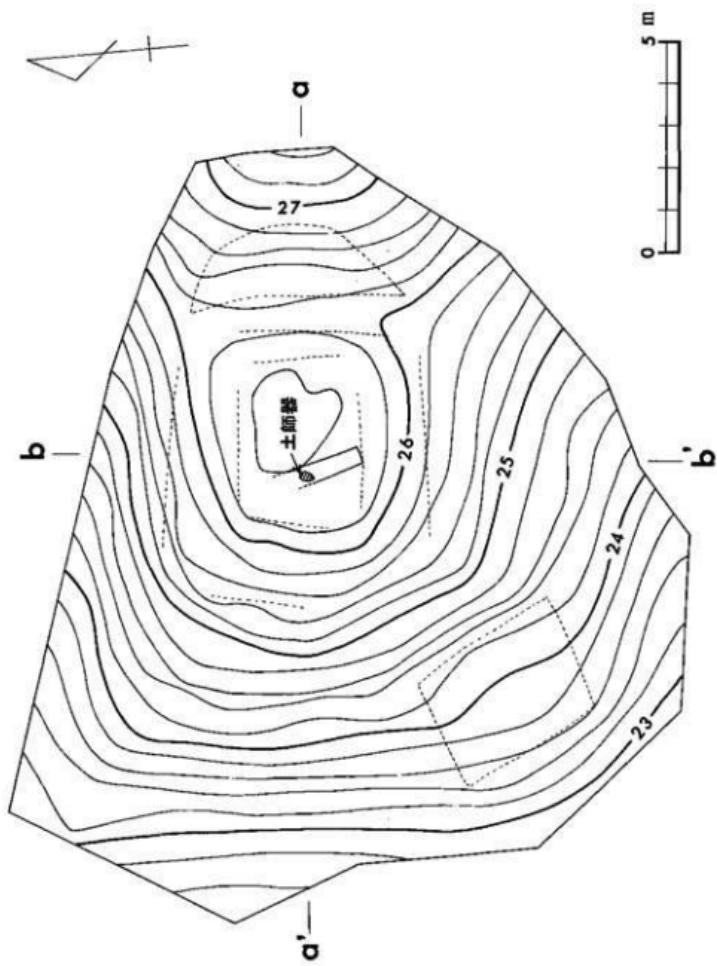
- ① 小規模な方墳で単独に存在すること。
- ② 主体部は木棺直葬であること。
- ③ 遺物は土師器で主体部上にあり、須恵器がみられないこと。
- ④ 主体部は古墳の対角線を意識している可能性がある。

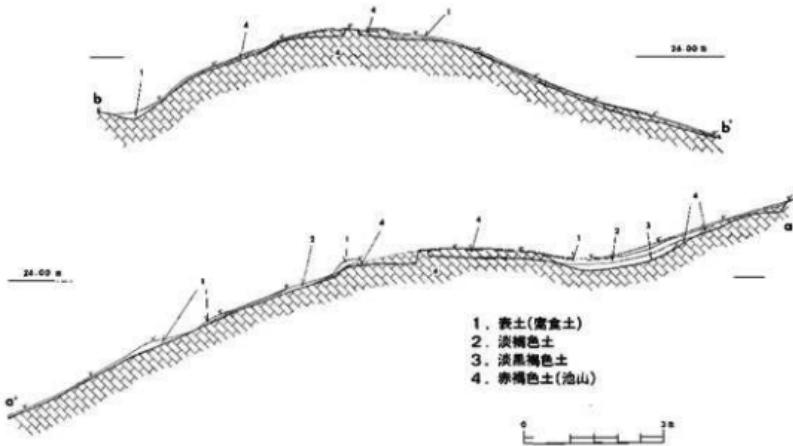
このうち、④については、後期古墳ではほとんどみられない。^{註11} ③の主体部上に壺、または壺を置く例としては、松江市新庄町客山1号墳、同竹矢町中竹矢SK27^{註12} があげられる。いずれも小規模な方墳で、前者は古墳時代中期、後者は前期のものである。このような主体部上での土器供獻は、弥生時代から古墳時代初頭にかけての墳墓に多くみうけられる。^{註13} 弥生時代の風習が古墳時代に至ってもわずかに残存しているとみるとべきであろう。ただし、



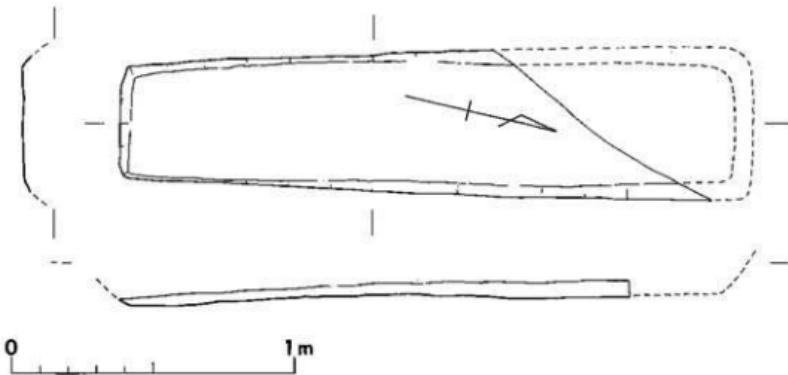
第2図 祖子分長池古墳実測図（調査前）

第3図 祖子分水嶺古墳剖面図（主体部検出時）





第4図 祖子分長池古墳埴丘断面図



第5図 主体部実測図

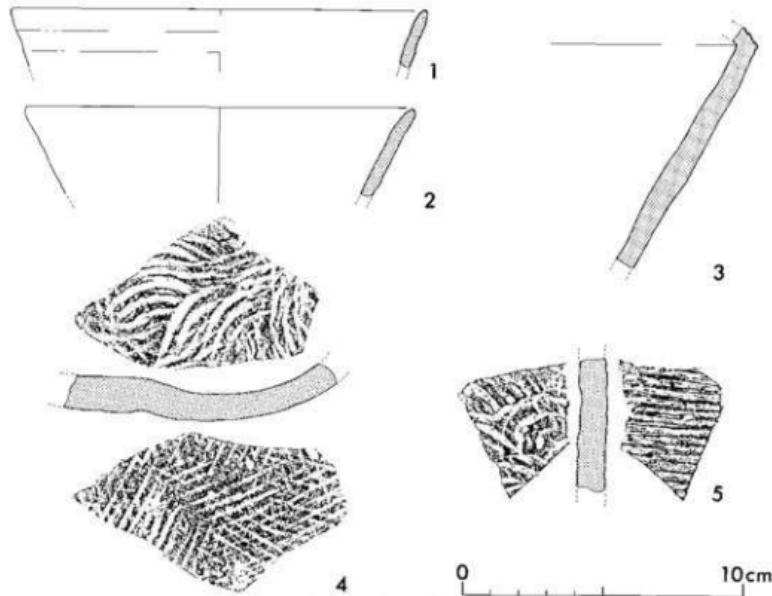
古墳時代後期には例を知らない。また、土師器は細片で器形を知ることができないが、本古墳に関する須恵器が発見されなかったことより須恵器が当地方に普及する以前の時期のもの可能性が強い。④の例としては出雲地方に散見され、八束郡八雲村増福寺古墳群^{註15}はこのような古墳群の好例である。現在のところ古墳時代中期に限ってみられる葬法である。こうした祖子分長池古墳の諸特徴から、古墳時代中期にその築造年代を求めることができよう。

IV 祖子分胡麻畑遺跡

祖子分長池古墳の存在する丘陵の南麓で工事中に掘削された上の中より若干の遺物を採集した（第6図）。遺物が採集されたあたりを中心に幅3.0mの試掘坑を丘陵麓に3か所設定し発掘を行ったが、遺構、遺物は何ら検出することはできなかった。

第6図で示したのは須恵器片である。これらの中には土師器片と第Ⅲ章で述べた円筒埴輪の小片が一片ある（図版2）。1と2は壺の口縁部で前者は復元口径15.0cm、後者は14.0cm。3は壺、もしくは平瓶の胴部と考えられる。肩部から胴部にかけての接合部は「く」の字状になり、底部にむかい直線的に窄む。外面に二条の凹線がめぐる。4、5は壺、あるいは甕の破片である。このうち、厚い4は底部に近い部分である。

以上のことから、祖子分胡麻畑遺跡で採集された遺物は、円筒埴輪片を除けば、ほぼ平安時代にその時期が求められるであろう。遺構は発見できなかったが、付近に同時代の集落跡の存在が予測される。^{註16}



第6図 祖子分胡麻畑遺跡採集須恵器

V 小 結

祖子分長池古墳の発掘調査の概要是以上のことであった。調査期間中、可能なかぎり祖子分地内の分布調査を実施し、新たに数基の古墳を確認したので、最後にそれらを紹介しながら本古墳について考察することにしたい（第7図、以下番号は第7図に対応）。

1 祖子分長池古墳（本書第Ⅲ章）

2 一の谷古墳（第8図）

祖子分の西側丘陵小字名一の谷の東斜面、祖子分長池古墳とは小平野を挟んで対峙する位置にある。墳頂部での標高は約17.0mである。墳形は径19.0×16.6mの円墳で墳裾はほぼ標高15.0mあたりにあり、高さは約2.0mを測る。墳頂部は10.0×11.0mの広い平坦面がある。西高東低の緩斜面の西側に幅4.7mの切削溝を掘り、それはそのまま墳丘を北側裾から東側裾へと平坦面となってめぐっている。南側の一部は自然の急斜面となっているためか現状では平坦面はみられない。したがって墳丘の大部分は盛土と考えられる。

一の谷古墳は、祖子分地内においては他の古墳がすべて方墳であるのに対し唯一の円墳で、朝鈴川流域内においても、西持田町宮垣古墳（径30.0m、第1図13）、同大源良古墳（径37.0m、第1図14）、東持田町原の空古墳（径25.0m、第1図21）の大形円墳に次ぐ規模である。^{註17}また、現在のところこれら4基の他に円墳は知られてはいない。出雲における大形円墳はほぼ古墳時代中期に限られるようであり、遺物からもそれが確認されつつある。^{註18}一の谷古墳もその外形や規模から、その年代は中期に位置づけておきたい。

3 荘捨古墳

一の谷古墳と同一丘陵上にあり約100m西の丘陵最頂部にある。一辺12.0m、高さ1.0mの方墳で対角線をほぼ南北においている。将来のバイパス拡幅工事予定地内に墳丘の約 $\frac{1}{2}$ がかかっている。

4 坂口古墳

莊捨古墳と同一丘陵上、北に約200m、標高約40.0mの位置、小字名坂口にある。一部を後世の山道によって削られているが、一辺約10.0m、高さ1.0mの方墳である。墳丘の一辺をほぼ南北においている。墳丘の西側に幅2.0mの切削溝がある。

5 貝崎南古墳

貝崎古墳群（第1図3、第7図10）の南北丘陵上、坂口古墳の北約250mの位置にある。墳裾の一部を畑によって失われているが、一辺7.0m、高さ1.0mの方墳で、その規模は

祖子分長池古墳に近い。

6 井上古墳（第10図）

祖子分長池古墳の北約400mの丘陵の先端に近い位置にある。墳頂部は標高約20.3mを測る。墳丘はかって畠に開墾されたようでかなりの改変を受けているが、墳丘の西側と南側の一部に裾を確認できるところがある。それは19.0mセンターあたりであり、復元すれば 12.0×13.0 mほどの方墳になる。現在確認できる墳裾からの高さは約1.3mを測る。墳丘の対角線をほぼ南北に向け、西側を除く三方には広い平坦面がみられる。墳丘の西側と北側に盗掘坑がみられた。

7 家ノ上古墳（第9図）

井上古墳の北約200mの丘陵の緩斜面、小字名家ノ上に所在する。墳丘の一部は現在墓地によって改変を受けているが、復元すると一辺約7.0mの方墳になる。墳丘東南部に幅2.0mの切削溝がみられるが、これは西側と東側へ続いているものと推定される。切削溝からの高さは0.7m、北西部で1.2mを測る。方位は墳丘の対角線をほぼ南北にあわせている。墳丘最頂部は標高約22.0mである。規模は祖子分長池古墳に近い。

8 後田古墳（第11図）

家ノ上古墳の北東約120mの位置、祖子分長池古墳より北に約800mの同一丘陵上の小字名後田にあるが、その位置は祖子分よりもあるいは東隣する八色谷を意識しているのかもしれない。墳丘は畠のためにかなり改変しているが、東裾と考えられる一辺が確認できるので、復元すれば一辺約11.0mの方墳となるであろう。墳丘の最頂部は標高23.4mである。墳丘上には現状では 3.0×4.0 mほどの平坦面がある。墳裾からの高さは1.0mである。方向はほぼ墳丘の一辺を南北に向けている。古墳の周囲は広い平坦面がめぐる。

9 前田古墳（第12図）

祖子分長池古墳の所在する丘陵の先端、後出古墳の西約100mの位置、小字名前田にある。墳丘は後世の改変を受けているが、全体としては比較的保存状態が良好で 14.5×15.5 mの方墳である。それぞれの辺に墳裾が認められる。東側の墳裾からの高さは約1.0m、西側では2.8mを測る。古墳の対角線を南北方向に向けている。東高西低の緩斜面を掘削し、墳丘の多くは盛土と考えられる。丘陵の掘削は標高18mセンターあたりからはじめまり、古墳の西側裾の切削溝の幅は約9.0mにおよぶ広いものとなっている。それは墳丘の北側から西側にかけてある幅2.0mの平坦面へつながっている。墳頂部の高さは標高18.05mで、不明確ではあるが 6.0×6.0 mの平坦面がある。

墳丘の西側は盗掘のためか他の部分と比較すると改変がすんでいる。測量中このあた

りから墳頂部にかけて若干の遺物を採集した。遺物の多くは円筒埴輪片で須恵器片である（第13図、図版4）。古墳の変更と採集された遺物は関係するものと思われる。円筒埴輪は2条タガ、3段作りと考えられ、上段と下段の外側はナナメハケ、中段は川西誠分類のB種ヨコハケがみられる。タガの断面は高い台形を呈す。中段の透かしは円形である。第13図1の資料によれば上段径28.0cm、6の資料で下段径21.0cmである。6、7でみると、下方にいくにしたがい断面形が先端の尖る、いわゆるはっきりとした底部調整が施されている。また、採集した資料の限りでは黒斑はみられない。須恵器については小片のため、器形、時期等については不明である。円筒埴輪片にみるその特徴は、川西誠編年のV期に該当し、当地方においては6世紀後半以降のものであり、古墳の年代を示している資料としてよかろう。

10 貝崎6号墳（第13図）

貝崎南古墳（第7図5）の北に群集して存在する方墳14基からなる貝崎古墳群がある。第12図に示したのは、そのうちの6号墳と仮称している方墳である。墳頂部に2.0×6.0mの盗掘坑がある他に、周辺は畠等によって若干の変更を受けている。墳體は北側と西側の一部に認められた。復元すれば17.0×17.0m、高さ3.0mの方墳となる。方位は古墳の対角線をほぼ南北方向にあわせている。墳頂部は盗掘坑を無視すれば約7.0×7.0mの平坦面となる。保存状態が良好である墳丘北西部斜面において、墳頂部より一2.0mあたりに幅0.5mの段築がみられるので、二段築成の方墳であることが知られる。西側の貝崎5号墳との間には、幅約8.0mの広い切削溝があり、それは墳丘北側から西側へかけての広い平坦面となって続いている。地形から推定すると墳丘のほとんどは盛土である。

遺物には円筒埴輪片がある（第12図3、4、図版4）。これらは墳丘北側から東側にかけての墳體あたりに多く採集された。薄手のもの（3）と厚手のもの（4）がある。4は底部調整のみられない須恵質で窯窓製品と考えられる。内外面とも粗いナナメハケが施されている。3、4ともタガは前田古墳採集資料（第13図）と比較すると断面が低い台形を呈している。

この他に、この古墳に關係する遺物として第12図1、2に掲げた土器と石器がある。1は弥生土器の口縁部で、口径14.0cmの複合口縁で、外側に4条の平行沈線がみられる。内面は頸部より下にヘラ削りを施すものである。これらは弥生時代後期の特徴である。2は蛤刃磨製石斧で、刃部は欠損している。現状での長さ14.5cm、最大径6.3×4.7cmある。弥生時代前期～中期にかけてのものと考えられる。これらの弥生土器と石器は、古墳の封土中より掘り出されたものと伝えられている。貝崎古墳群の中では他に盗掘坑のみられる

古墳はないので、これらの遺物は本古墳に関係するものとして差しつかえなかろうと思われる。このことは、貝崎丘陵の下には弥生時代前期～後期にかけての大規模な低湿地遺跡である西川津遺跡（海崎地区）^{註23}があることと無関係ではないと考えられる。おそらく西川津遺跡に關係した弥生時代の集落跡や墳墓といった遺構が、この貝崎丘陵に古墳が築かれる以前から存在しており、貝崎6号墳築成時に盛土の中に入りこんだものと推定される。

朝酌川流域内においては、二段築成の方墳は、他に西川津町の住吉神社裏古墳（第1回12）があり、山陰地方須恵器編年のはばⅡ期（古墳時代中期）の須恵器や円筒埴輪が出土している。^{註24}貝崎6号墳採集の円筒埴輪の特徴はほぼ同じ時期が考えられ、須恵器編年Ⅰ～Ⅱ期（5世紀後半～6世紀前半）^{註25}の間に位置づけることができる。さらに、この貝崎6号墳の時期は、貝崎古墳群全体の年代を示唆しているように思われるとともに、この古墳群が祖子分地内の小規模な谷水田ばかりでなく、北側眼下を流れる朝酌川を意識して築かれたと考えられることが特に注意されよう。

以上、祖子分長池古墳の発掘調査の結果とその周辺の古墳のありかたから得られた知見をまとめると次のようである。

- a. 祖子分長池古墳は、古墳時代前半期（古墳時代前期～中期——4世紀～6世紀前半——）と推定したが、遺物によって年代を知ることのできる貝崎古墳群以外の、一の谷古墳、刈捨古墳、坂口古墳、貝崎南古墳、井上古墳、家ノ上古墳も概ね同時代と考えることができる。
- b. 方墳は方位を意識していると思われるふしがある。^{註26}
- c. 前半期の古墳の中では、円墳（一の谷古墳）にその規模において優位性が認められる。
- d. 前田古墳は後半期（古墳時代後期——6世紀後半以降——）の時期であり、内部上体は横穴式石室と考えられる。その横穴式石室は、墳丘の規模や朝酌川流域の古墳のあり方からして、いわゆる切石を使用した石棺式石室の構造である可能性もある。^{註27}
- e. 前半期の方墳に、単独で存在するもの（祖子分長池古墳等）と群集して存在するもの（貝崎古墳群）^{註30}がみられる。このことは、古墳時代中期には祖子分地内の小さな谷水田ばかりでなく、朝酌川（『出雲国風上記』では水草川）のような大きな河川の治水・灌漑にある程度成功したことを示唆しているものと思われる。

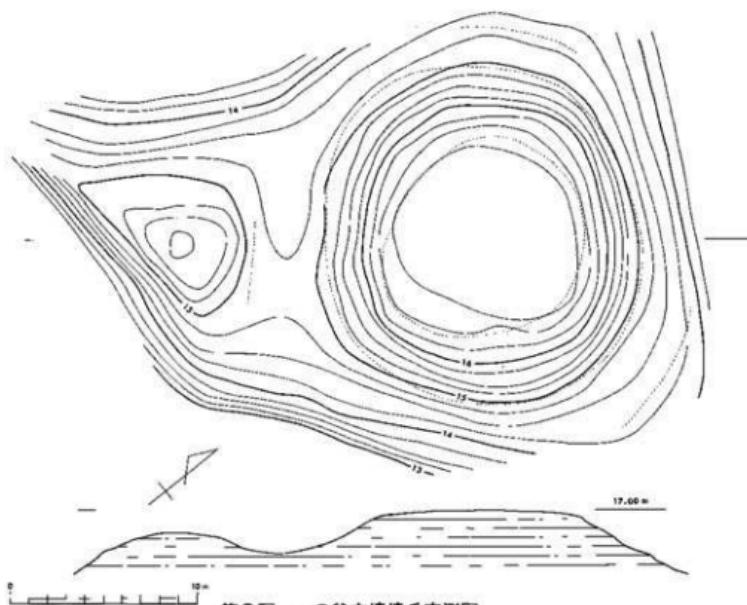
このように、朝酌川流域内全体において展開された古墳の様相の縮図が、この祖子分地内にもあり、祖子分長池古墳は一辺7.0mに満たない小規模な方墳であったが、この地域

の古墳時代の歴史を知るうえに欠かせない存在であり、その意義を充分に認識しておく必要があろう。

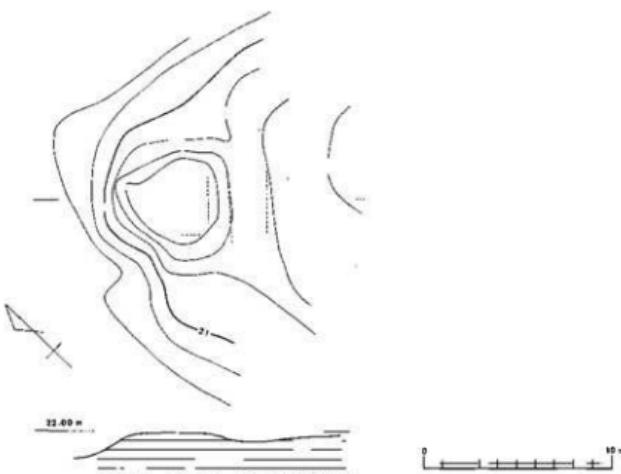
- 註1 横山純夫・川原和人『主要地方道松江一境線バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』島根県文化財愛護協会 昭和51年3月
- 2 勝部 昭『主要地方道松江一境線バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ』島根県教育委員会 昭和57年2月
- 3 山本 清「歴史」『川津郷土誌』 昭和57年11月
- 4 内田律雄『朝駒川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅲ』島根県教育委員会 昭和62年3月
- 5 註4と同じ
- 6 内田律雄『朝駒川河川改修工事に伴う西川津遺跡発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会 昭和63年3月
- 7 岡崎雄二郎『小丸山古墳群』松江市教育委員会 昭和59年3月、岡崎雄二郎『松江・道仙古墳群』『島根県埋蔵文化財調査報告書第X集』島根県教育委員会 昭和58年3月
- 8 岡崎雄二郎『松江市北東部遺跡分布調査報告書(1)』松江市教育委員会 昭和59年3月
- 9 註4と同じ
- 10 註4と同じ
- 11 島根県内では現在のところ後期に下る木棺古墳の古墳はみあたらないが、広島県福山市吹越第2号古墳のようない例もある。『石越山古墳群』広島県教育委員会 昭和56年3月
- 12 岡崎雄二郎『松江・宍山古墳群』『島根県埋蔵文化財調査報告書第VII集』島根県教育委員会 昭和56年3月
- 13 宮沢明久『中竹矢遺跡』『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会 昭和58年3月
- 14 例えば西岡突出型古墳の主軸部上面の供狀土器など。
- 15 宮本徳昭『増福寺古墳群発掘調査報告書』八雲村教育委員会 昭和57年3月
- 16 松江市西川津町西川津遺跡海崎地区で同様な須恵器が採集されている。
- 17 本庄考古学研究室『出雲の主要古墳一覧』『山陰考古学の諸問題』 昭和61年10月
- 18 原田律夫『出雲の大型円墳について』『季刊文化財第38号』島根県文化財愛護協会 昭和55年3月
- 19 片岡詩子・今岡 稔他『大原1号墳の測量調査』『鳥取考古学会誌第3号』島根考古学会 昭和61年11月
- 20 川西 誠『円筒埴輪統論』『考古学雑誌第64巻2号』 昭和53年
- 21 註20と同じ
- 22 山本 清先生の御教示による。
- 23 註6と同じ
- 24 山本 清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』 昭和46年7月
- 25 註4と同じ
- 26 具体的な年代観は註4に示した。
- 27 棚の頭部を北に置くことと、馬背状の丘陵の方向との関係がこのような現象となってあらわれているとも考えられる。
- 28 註26と同じ
- 29 山本 清「古墳の地域的特色とその交渉 —山陰の石棺式石室を中心として—」『山陰古墳文化の研究』 昭和46年
- 30 内田律雄『土井13号墳発掘調査報告書』八雲村教育委員会 昭和54年3月



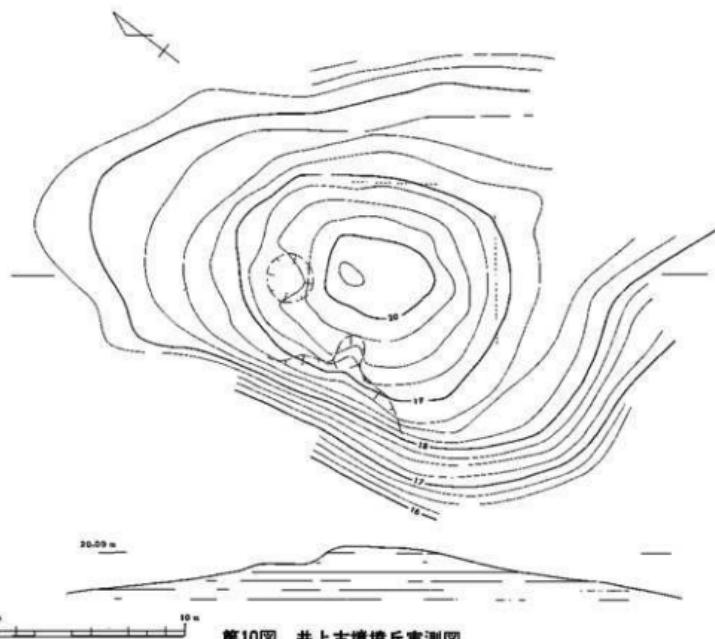
第7図 祖子分地内の古墳



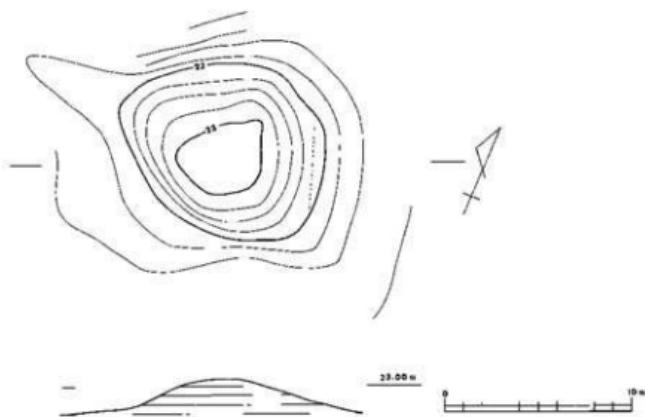
第8図 一の谷古墳墳丘実測図



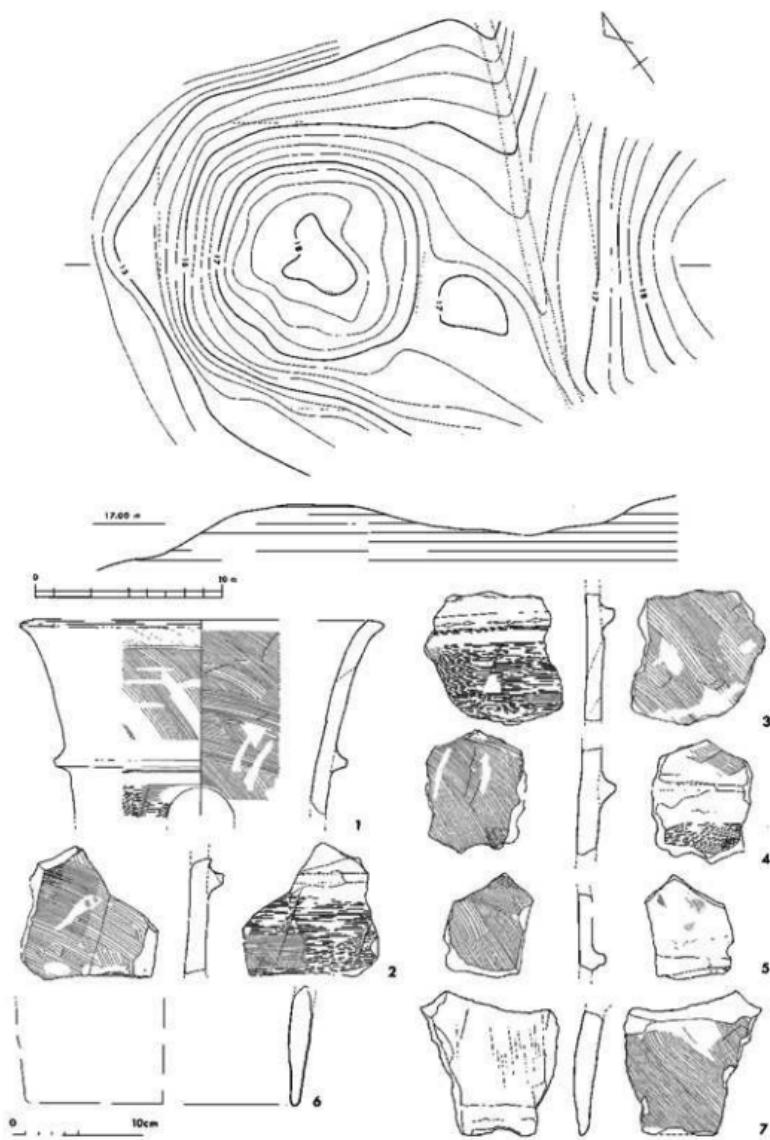
第9図 家の上古墳墳丘実測図



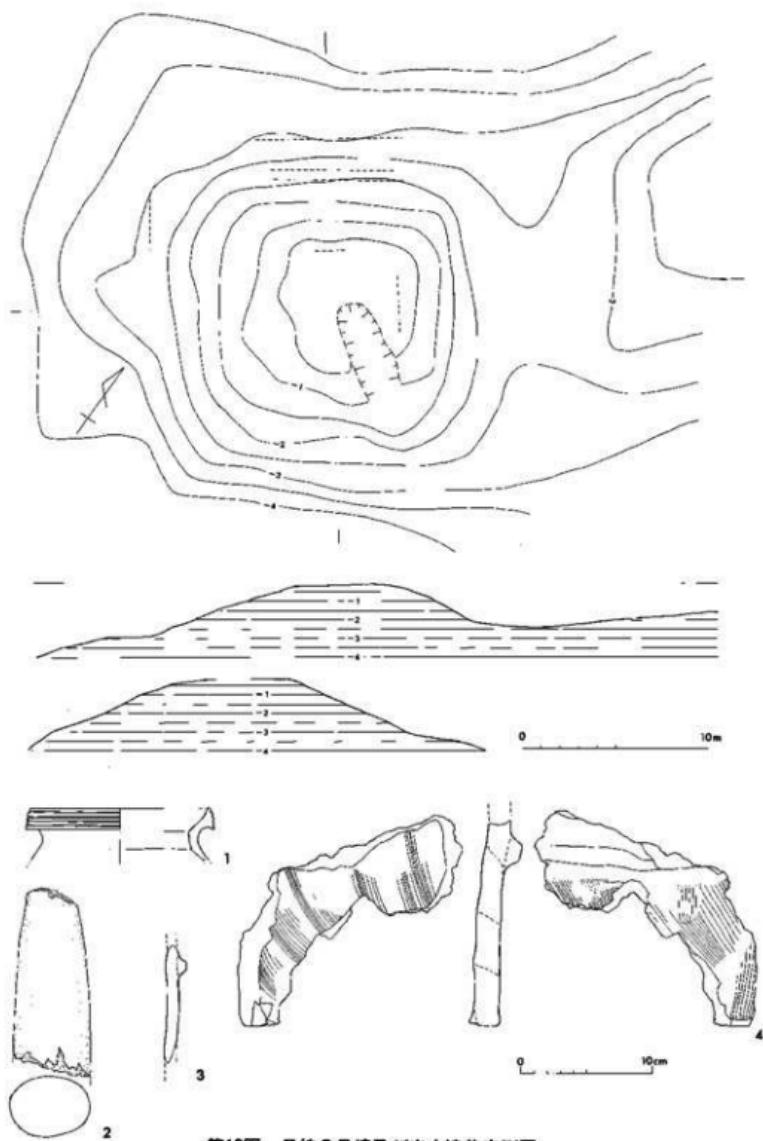
第10図 井上古墳墳丘実測図



第11図 後田古墳墳丘実測図



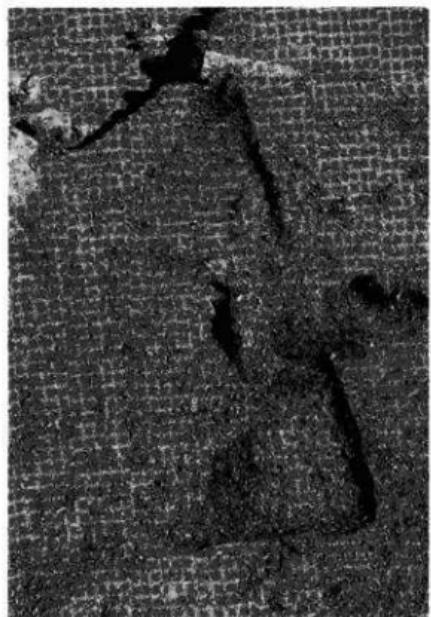
第12図 前田古墳及び出土遺物実測図



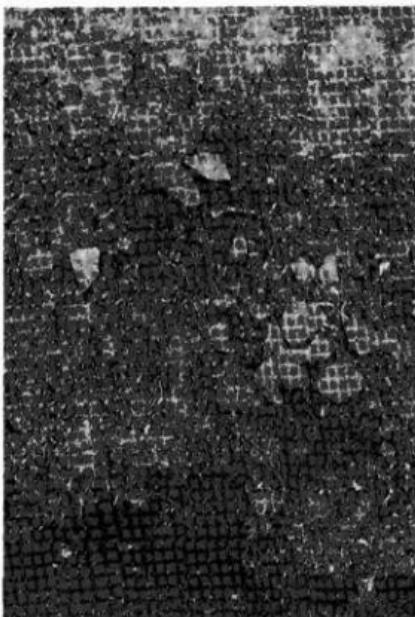
第13図 貝崎6号墳及び出土遺物実測図



祖子分長池古墳（調査前 東よりみる）

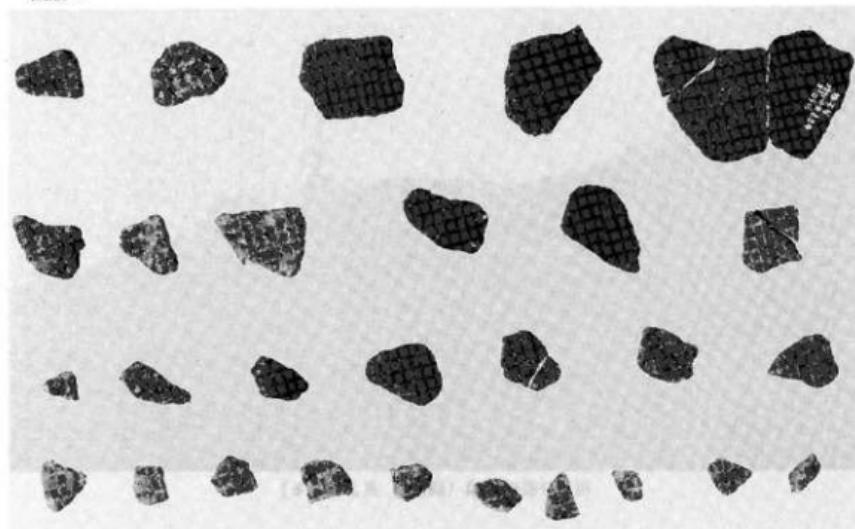


主 体 部

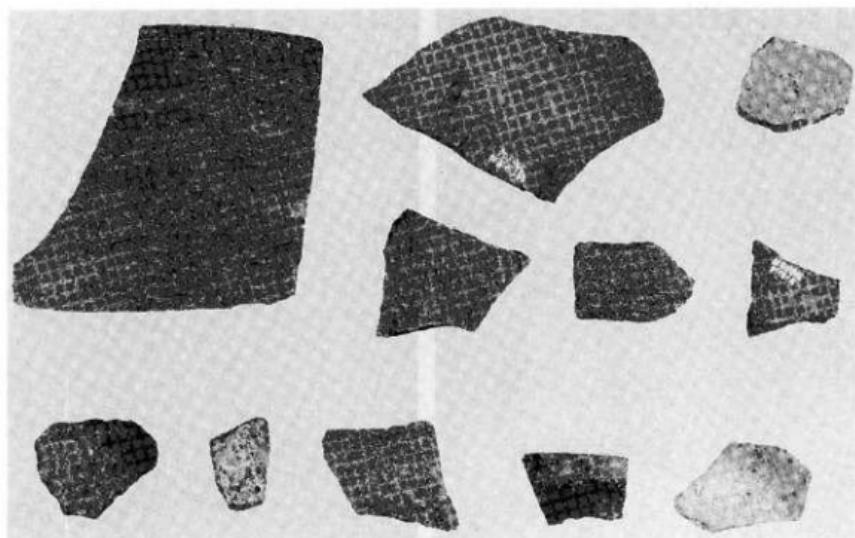


土師器出土状態

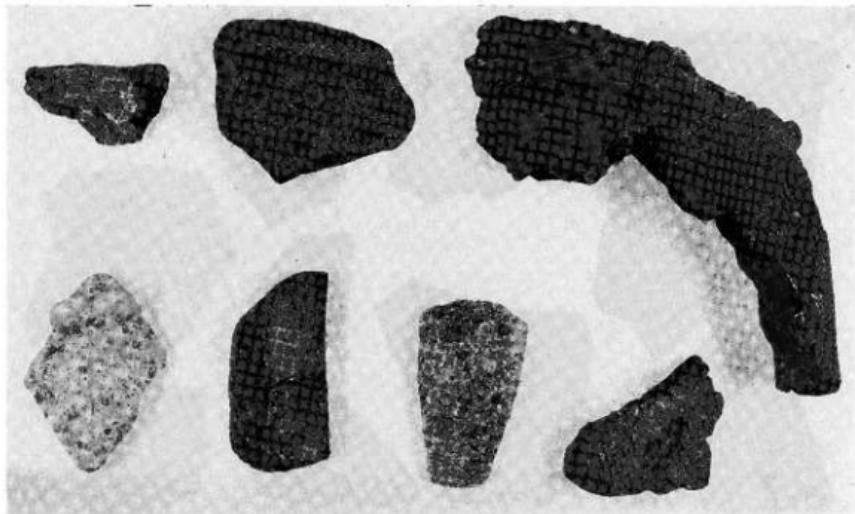
図版2



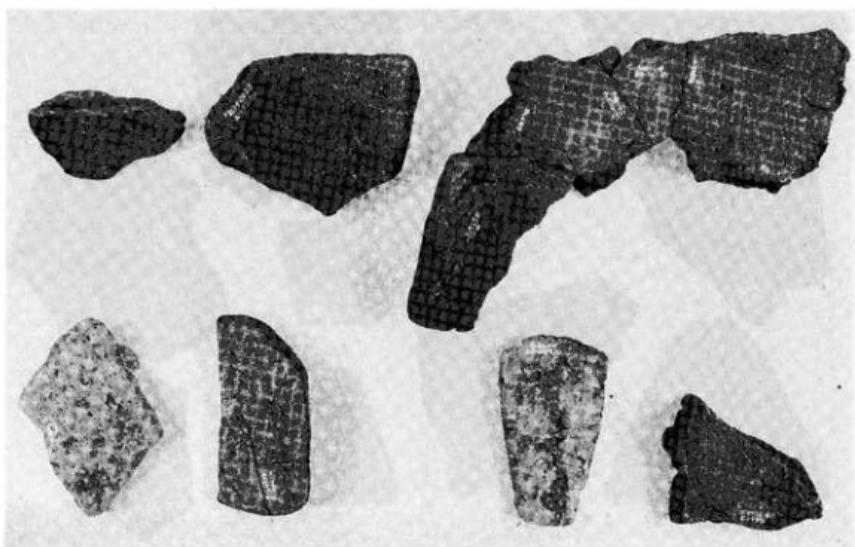
祖子分長池古墳主体部直上出土土師器



祖子分胡麻畑遺跡採集遺物

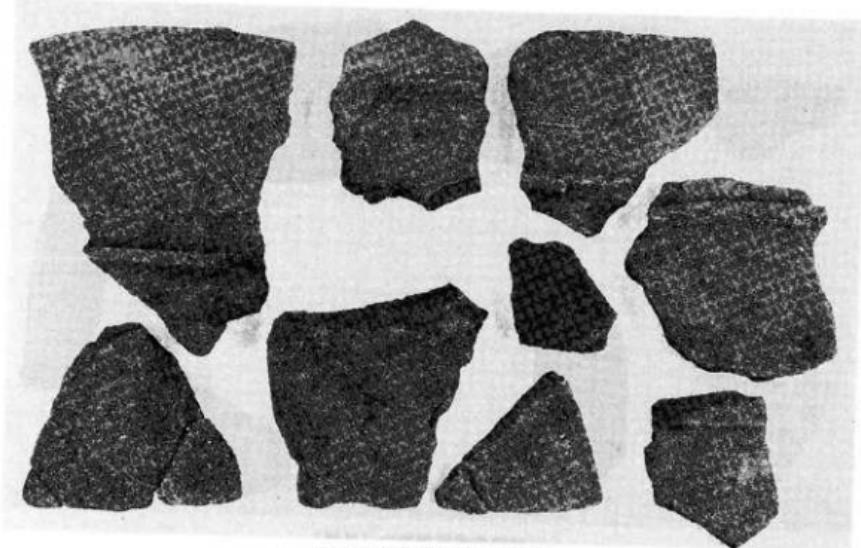


前田古墳採集遺物（外面）

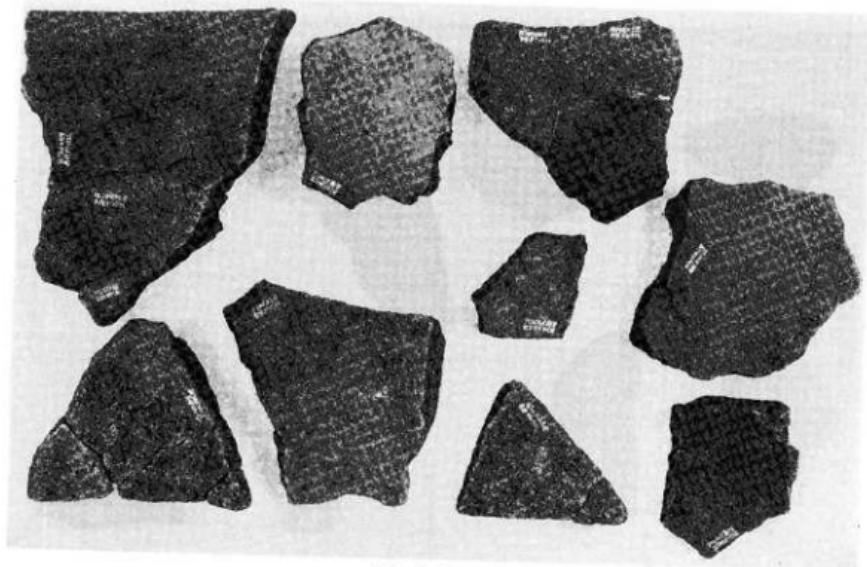


同上（内面）

図版4



貝崎6号填埋集遣物（外面）



同上（内面）

昭和63年12月15日

国道431号バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告 III

発行 松江市殿町1番地
島根県教育委員会
印刷・製本
柏村印刷株式会社